

音阿弥生誕六二〇年

# 京都観世会五月例会

平成30年5月27日(日) 午前11時開演 (午前10時開場)



主催 公益社団法人 京都観世会

頼政

〈能〉

橋本雅夫

樋の酒

〈狂言〉

野村又三郎

藤

〈能〉

河村晴久

葵上

〈能〉

浦部幸裕

## 会場 京都観世会館

〒606-8344 京都市左京区岡崎円勝寺町44 (東山仁王門東入)

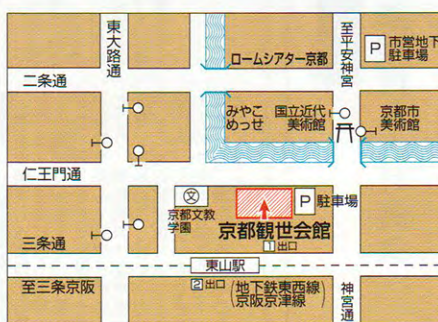
お問合せ・お申込み ☎ 075-771-6114

WEBサイトの公演情報からご予約ができます <http://www.kyoto-kanze.jp>

チケットぴあでのご購入ができます Pコード: 482-846

前売券 (1階当日指定席) 6,000円  
当日券 (1階当日指定席) 6,500円  
学生券 (2階自由席) 3,000円

### 京都観世会館案内図



◆京都観世会館へは  
JR京都駅から—  
市バス[5][100]で「岡崎公園 美術館・平安神宮前」下車 (乗車時間約30分)  
地下鉄丸丸線「烏丸御池駅」で東西線乗り換え 「東山駅」下車 (乗車時間約20分)  
阪急河原町駅から—  
市バス[31][46][201][202][203][206]で 「東山仁王門」下車 (乗車時間約15分)  
京阪三条駅から—  
市バス[5]で「岡崎公園 美術館・平安神宮前」下車 (乗車時間約7分)  
地下鉄東西線で「東山駅」下車 (乗車時間約1分)  
JR二条駅から—  
地下鉄東西線で「東山駅」下車 (乗車時間約8分)  
山科・醍醐方面から—  
地下鉄東西線で「東山駅」下車 (乗車時間約9~17分)  
地下鉄東西線「東山駅」から—  
徒歩約5分

◆東隣に有料駐車場(約20台)がございます。

# 京都観世会五月例会

(能)

源三頼政 頼政

旅僧 宝生欣哉

大鼓 石井保彦

小鼓 幸正昭

間 宇治里人 奥津健太郎

旅僧 宝生欣哉

大鼓 石井保彦  
小鼓 幸正昭  
笛 森田保美

## 樋の酒

(狂言)

太郎冠者 野村又三郎

主 奥津健太郎  
次郎冠者 野口隆行

(一時過)

休憩二十分

(能)

里女 藤ノ精 河村晴久

從僧 有松遼一

旅僧 小林 努

大鼓 河村 大

從僧 岡 充

小鼓 林 吉兵衛

大鼓 小寺佐七

市和

間 多崎ノ浦人 野口隆行

休憩十五分

(仕舞)

兼平 千手 昭君

味方 團

青木道喜

大鼓 信行

(能)

巫女 河村和晃

御息所ノ生靈 浦部幸裕

大鼓 谷口正壽

太鼓 井上敬介

葵 上

横川小聖 有松遼一

小鼓 竹村英敏

陸 笛 左鴻泰弘

間 臣下ノ從者 野村信朗

附祝言

(終了予定 四時過)

## 後見・地謡

(後見) 河村和重  
片山九郎右衛門

河村浩太郎  
大江泰正  
梅田嘉宏  
深野貴彦  
片山伸吾  
吉浪壽晃  
分林道治

(後見) 野村信朗

(後見) 河村和貴  
杉浦豊彦

樹下千慧  
大江広祐  
宮本茂樹  
松野浩行  
林 宗一郎  
味方 玄  
河村晴道  
田茂井廣道

(地謡) 古橋正邦

大江泰正  
古橋正邦  
浦田保浩  
吉田篤史

(後見) 浦部好弘  
井上裕久

浦田親良  
河村和貴  
橋本忠樹  
橋本光史  
浅井通昭  
河村博重  
浦田保親  
越賀隆之

## 解説

頼政

諸国一見の旅の僧が宇治の里を通りかかると、一人の老人に名所案内を乞うた。見どころ多い宇治川の明媚な眺めを楽しむうちに、老人は僧を平等院へと導く。そこで扇の形に取り残された芝を見つけた僧に、老人はその謂れを語り始める。

武勇で名を成し、また優れた歌人でもあった源三位頼政は、平家の専横に我慢がならず、治承四年ついに高倉宮以仁王を奉じて挙兵した。しかし時期尚早であったのであろうか、あえなく宇治橋の合戦で敗れ、五月二十六日に平等院で自害して果てた。七十七歳の勇姿だった。扇を敷いた上に座して死んだこととから、今なお芝を扇状に残して頼政を偲んでいるのである。老人は今日がちょうど頼政の命日に当たると告げて、実は自分こそその幽霊であると言いつつ近づいて来ようとする。中入る近在の者か合戦の詳しい経緯を聞いた僧が、頼政を弔うために扇の芝で再来を待つために、夢中に法体の老武者が現れる。頼政の霊は僧の修羅の有様をまざまざと思い起こすのである。

兵を挙げると同時に平家の大事に追われた頼政は、疲れたに仁王のために急ぎ平等院に入つた。宇治川を挟んで平家軍が対峙するも、平家側の若武者の奮闘によって川を一時突破され、老武者は自ら死期を悟る。埋木の花吹雪の事なかりしに身のなる果はあはれなりけり。無念を伝える辞世の一首を残して、波乱多き生を絶つたのだ。

藤 都の僧が加賀国から善光寺にまいる途中、越中国多祇の浦で、今を盛りの藤の花を眺め、花に寄せて「おのが波に多祇の恨めしの身ぞ」と、わが身の零落を歎いて「口ずさんでいると、人の女性が現れ、同じことならどうして「多祇の浦やみぎはの藤の咲きしよりの歌を詠じて下さらぬかと答め、自分はここの花の精である」といつて消え失せる。中入るやがて夜になると、花の精が再び現れ出て、藤花讚美の舞の袖を返すとみるうち、曙のおとずれとともに消えていく。

## お客様へお願い

- ◆特別会員席以外の座席券を、当日午前10時から先着順にお引換えいたします。
- ◆開演中のお出入りはなるべく遠慮ください。
- ◆許可なき写真撮影・録音・録画はお断りいたします。
- ◆場内では携帯電話等の呼出音をお切りください。
- ◆予告なく出演者に変更がある場合がございますので、あらかじめご了承ください。
- ◆東隣に有料駐車場がございます。満車の節は岡崎公園市営地下駐車場をご利用ください。

## 【表紙写真】

《頼政》片山幽雪

金の星渡辺写真場 撮影

## 次回予告

### 京都観世会六月例会

平成30年6月24日(日)

午前11時開演

(能) 小督 松野 浩行

(狂言) 文山賊 小笠原 匡

(能) 杜若 浦田 保親

(能) 融 観世 鏡之丞

白式舞踊之伝

葵上

左大臣の息女で光源氏の正妻である葵上に、正体のわからぬ物の怪が憑いた。朱雀院に仕える臣下が照日といふ梓巫女(弓を鳴らして口寄せをする霊力者)に物の怪を呼び出させたところ、いわくありげな貴女が破れこぼれ、現れる。それは六条御息所の生霊で、かつて賀茂祭で葵上の一行と車争いをしたとき受け六条へ向かう途中、愛する源氏の足が遠のいていいる憂さから出てきたものだった。先の東宮妃としてこよなく時めいていた自分が、何の因果か今では人待つ日影の身に落ちぶれている。臥せている葵上(小袖で表現される)に激しい怨憤をぶつけた御息所は、ついには我を忘れて後妻打ちに及ぶ。葵上が生きていて限りは源氏の愛も我が元に戻らないと思いつめ、更に破れ車に乗せてあの世へ連れ去らうとする。(物籠または中入る) 怨念の凄まじさに臣下は恐れ、從者に命じて行法中の横川の小型を呼んで来させた。苦しむ葵上に前に小型が数珠を揉んで祈棒を始めたところ、御息所の生霊が悪鬼と変じて現れる。強い法力に負けじと打杖を振り上げる怨霊であったが、己の妄念を悟つたのかやがて怒りを和らげて観念し、成仏した身となり去って行く。